碑（いしぶみ）の記憶 ～石碑編～ ⑦

宮古市崎山・女遊戸集落

2度の災禍 証言集も

三方を山に囲まれた宮古市崎山の女遊戸（おなべ）集落は、1896（明治29）年の大津波と1961（昭和36）年の三陸フェーン大火で壊滅的な被害を受けた。

明治の大津波の海嘯（かいしょう）記念碑には同集落の全21戸中19戸が流失し、住民63人が犠牲になったと刻まれている。「記念碑の隣には地蔵や念仏供養碑も並び、毎月住民が集って先祖を供養してきた。

しかし、時間の経過とともに碑の存在感は薄れ、東日本大震災の発生当時、碑に刻まれた内容まで理解していた住民はわずかだったとみられる。同集落の前川節子さん(70)は「震災の津波が来てから、改めて意識するようになった」と語る。

一方、集落が焼け野原と化した三陸フェーン大火については、91年に地元自治会が100人近い住民の記憶を伝える書籍「三陸フェーン大火 あの悪夢から三十年」をまとめ、各世帯に配った。同書によると、集落内の住家全34戸が燃え、被災者は226人、被災額は推定1億円に上った。

集落内に立つ三陸フェーン大火記念碑には「地を駆けるように、忽（たちま）ちにこの部落を一瞬のうちに全戸焼失、野も山も、全く焼土（しょうど）と化した」と刻まれる。

当時の小学2年生がつづった作文には「ぼくは、とてもさびしかった。そして、火事がゆめだとおもった」などと思いがつづられており、住民一人一人の生の声が当時の災害の記憶をつないでいる。

海嘯（かいしょう）記念
明治29年旧5月5日、大津波のため集落の21戸中、流失家屋は19戸、溺死者は63名が出て、未曾有（みぞう）の惨状を極めた。
今年はちょうど23周年に当たるため、集落共同で建立する
大正7年旧5月5日
（現代語訳）

近所で声掛け命救う

海側の山に津波がぶつかった瞬間、「ドーンッ」という爆音が山間部に鳴り響き、やがて建物をのみ込む「バリバリバリ」という音が迫ってきた―。

女遊戸集落の住民らによる東日本大震災の証言をまとめると、こうした状況が浮かび上がる。その一人、前川寿（ひさし）さん(70)が集落内の被害をまとめた資料によると、38世帯中22世帯が津波で流失したが、全員が高台に避難して犠牲者はなかった。

山に囲まれた地形から、三陸フェーン大火の際は火に包囲された同集落。しかし、家々のすぐ近くに山がある環境は高台避難を容易にした。

前川さんは「津波が来たら裏山に逃げることを、当たり前のように父から教わってきた」と語る。地震が起きると山に逃げ、そのまま夜を明かすこともあったという。

普段から近所で声を掛け合い、住民のほとんどが知り合いという同集落。それは災害時に逃げ遅れた人がいても周りがすぐに気付く環境でもある。

同集落の前川峰子さん(71)によると、震災直後、「本当に津波が来るのか」と言って、なかなか避難しない高齢男性もいたという。しかし、高台の貴船（きふね）神社に逃げた住民らが大声で「上がれ」「津波が来るぞ」と呼び掛けたことで、この男性も無事避難できた。

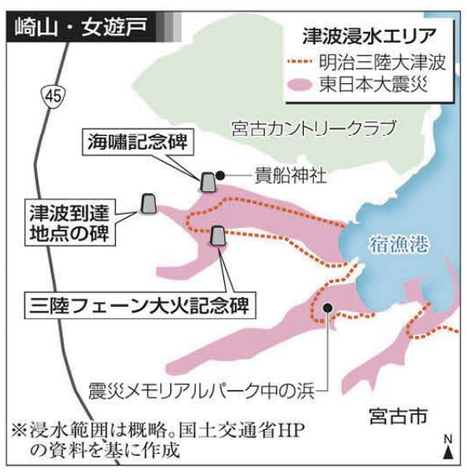
震災の前日、同集落の集会所で崎山地区の区長らによる津波対策の会合が開かれたことも、住民の避難意識の高まりにつながったとみられる。

震災から7年半余りが経過し、津波で倒壊した防潮堤や護岸はすでに復旧。再建された地区集会所前の広場では週末には、小学生や園児がキャッチボールやリレーで遊び、山あいに笑い声を響かせる。

2度の大災害に見舞われながらも、たくましく暮らし続ける女遊戸集落の住民たち。避難の大切さを共に胸に刻み、住民同士の強い絆を脈々と受け継いでいる。

再建された地区集会所前の広場で駆けっこをして遊ぶ女遊戸集落の子どもら

三方を山に囲まれ、東西に長い女遊戸集落。三陸フェーン大火では集落一帯が火に包まれた（本社小型無人機で撮影）



2011年4月29日　震災で38世帯中22世帯が流失し、防潮堤や集会所も流された女遊戸集落（前川寿さん提供）

◇お断り　25日付から「復興最前線」を再開します。

東日本大震災

仮設商店街 絆胸に門出

陸前高田 商店主ら解散式

陸前高田市竹駒町の陸前高田未来商店街（橋詰真司理事長）は23日、各商業者の移転や本設再建が決まり解散式を行った。2011年12月の開設から約6年10カ月。さまざまな飲食や雑貨店舗の店主や、けせん朝市の参加者ら16人が集まり、これまでの活動の写真などを見ながら会話を弾ませた。事務局で奮闘した荒木（旧姓種坂）奈保子さん(32)に橋詰理事長(42)が感謝状を贈った。

荒木さんは「6年前の自分を今褒められたようで本当にうれしい。何もないところから自分で作っていくが整備したプレハブの仮設店舗が完成し、13年3月に本格オープンした。「鶴亀鮨」や「菅久菓子店」など飲食店のほか、「ファッションロペ」「Laugh（ラフ）」など衣料品、雑貨店も入り

解散式は現地で行い、7苦労や楽しさを学び、今に生きている」と目を潤ませた。

同商店街はコンテナ5基を店舗などとして開設。さらに中小企業基盤整備機構を提供したほか、週末恒例の朝市も開催するなど被災地を元気づけてきた仮設商店街。「気持ちは一つ。未来商店街を巣立った心意気をこれからも見せていこう」とさらなる活躍を誓い合った。

最大11店舗で運営。商店主らでイベントを企画するなど温かみがあふれる商店街として人気だった。現在は整骨院1店舗が本設完成まで入居しているが、年内には順次撤去作業も始まる。

橋詰理事長は「震災直後は支援物資に頼った生活で、何もないまちで一歩ずつ自立しようとこの商店街が始まった。みんなの力があってここまで続けてこられた」と感謝。桜木家具店の高橋勇樹さん(41)は「より良い商売ができる店にしていくことが支援の恩返しになると思っている」と意欲を新たにした。

今後の活躍を誓い合いながら看板前で笑顔を見せる陸前高田未来商店街の商店主ら

防災マイスター養成へ講習開始　北上市

北上市は23日、同市柳原町の北上地区消防組合消防本部で、市自主防災マイスター講習を初めて開いた。災害時対応などを学んだ受講者を市独自のマイスターに認定する仕組みで、各地域の防災活動のリーダーを養成する。市内の自主防災組織は110団体。3年間で約150人のマイスター養成を目指す。

市内の自主防災組織の代表や会員ら46人が参加。座学で自助、共助の重要性や自主防災組織の役割、気象の基礎知識を学んだ。

避難所などで発生しがちな多様な問題にどう対応するか、判断力を養うクロスロードゲームも体験。「避難者3千人に対し、食料は2千食しかないが配分するか」「発災から1カ月、自宅で生活している人が弁当だけ取りに来るが渡すか」などの問いに「配れるだけ配り世帯内で分けてもらう」「1カ月なら生活インフラが復旧しているので渡す必要はない」などと複数の対応策を考えた。

同市上江釣子の小笠原文保さん(73)は「さまざまな意見が参考になった。緊急時は素早い判断が求められるので役立てたい」と心にとどめた。

市は受講者に認定証と腕章を交付し、各地域の防災訓練などで知識を役立ててもらう。

避難所での問題を想定したゲームに取り組む参加者

文化活動通じ元気に

宮古市大通
市民文化会館運営ディレクター
佐々木芳江さん(49)

被災した同会館は2014年に再開した。2月の初の市民劇では、演出助手として演出家と演者の橋渡し役をした。スタッフや演者の中には、震災で亡くなった方の思い出を抱え、月日の経過とともに悲しみを増す人もいた。みんなで作り上げる喜びや劇を通じた新しい出会いの中で、「生きてて良かった」と感じてほしいと思い取り組んだ。これからも文化活動を通して、市民を元気づけていきたい。

題字
山下文男さん

いわて漁業無線情報（23日）

◆釜石無線局所属船

▼指導調査船

りあす丸	正午N33.04E141.56 水26.0コース294スピード9.0。24日11時三崎港外着	
北上丸	8時釜石発毛ガニ漁期前調査向け、調査終了後釜石向け12時10入港	

▼マグロはえ縄船

18欣栄丸	42回目操業中	
53欣栄丸	操業中	
81欣栄丸	40回目操業中	
83欣栄丸	変わりなく94回目操業中	
88欣栄丸	106回目再開操業中	
128欣栄丸	30回目操業中	
138欣栄丸	89回目操業中	
151欣栄丸	南下航行中23日7時（現地時）ラスパルマス港外着予定	
158欣栄丸	操業中	
51勝運丸	なぎ良く続航中	
151勝運丸	操業再開	
68清福丸	続航中24日朝8時（日本時）バリ着予定	
78清福丸	操業中	
88清福丸	操業中	
21新生丸	操業中	

▼サンマ船

58欣栄丸	暮れより調査にかかる
65欣栄丸	漁場向け中

災害義援金受け付け

【東日本大震災】

◆銀行振り込み
▽岩手銀行本店（普）2135547
▽北日本銀行本店（普）7028487
▽東北銀行本店（普）3237448
▽盛岡信用金庫本店（普）0354142
▽東北労働金庫盛岡支店（普）5858584
▽岩手県信連本所（普）0027190

◆岩手日報社窓口
本社と二戸、花巻、北上、奥州各支局と一関支社で。平日の午前10時～午後4時（土・日・祝日は除く）。
※口座名は、岩手銀行は「（株）岩手日報社義援金口」。他は「（株）岩手日報社」。同一銀行からの振り込み手数料は無料（窓口取り扱いのみ）。

【北海道胆振東部地震】

◆岩手日報社窓口
本社事業部で平日の午前10時～午後4時。土・日・祝日は除く。
◆振り込み
▽ゆうちょ銀行・郵便局00130-1-673591
口座加入者名「日赤平成30年北海道胆振東部地震災害義援金」
※受領証の発行を希望する場合は、通信欄に「受領証希望」と記載のこと。

【西日本豪雨】

◆岩手日報社窓口
本社事業部で平日の午前10時～午後4時。土・日・祝日は除く。
◆振り込み
▽ゆうちょ銀行・郵便局00130-8-635289
口座加入者名「日赤平成30年7月豪雨災害義援金」
※受領証の発行を希望する場合は、通信欄に「受領証希望」と記載のこと。

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。